

こども音楽コンクール 音源審査 録音の手引き

審査では演奏の質で評価する為、録音の質は影響しませんが、音源に大きな問題があると審査が困難な場合があります。そこで「演奏を良い音で録音するためのポイント」をまとめました。これはあくまでも参考資料です。録音方法を悩んでいる方、困っている方は参考にいただければ幸いです。

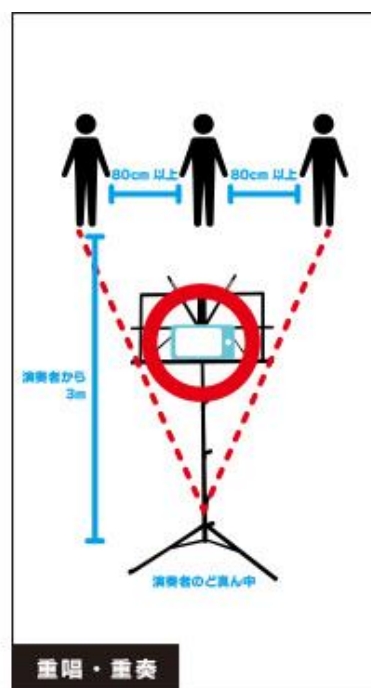
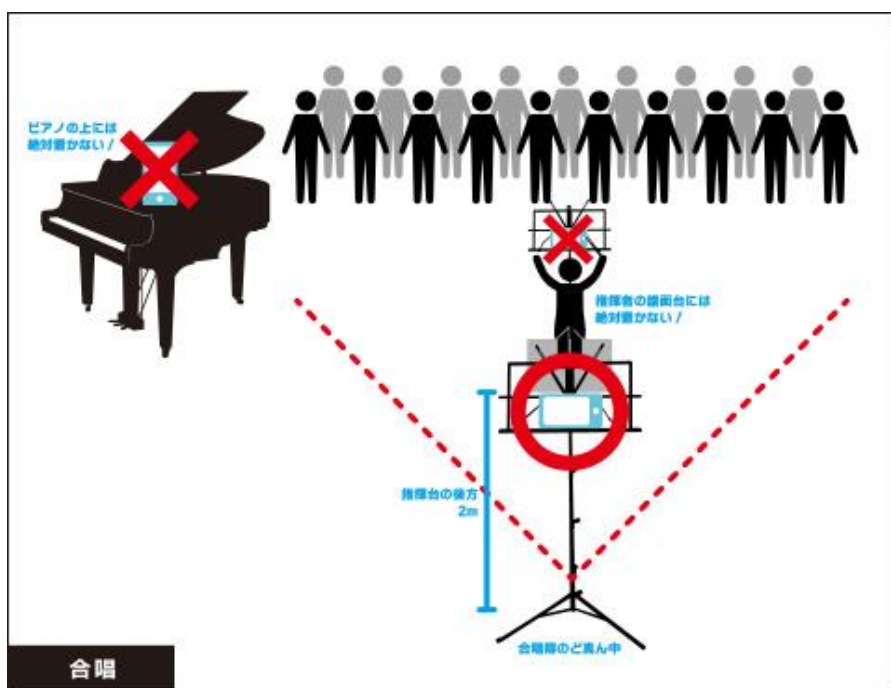
良い音で録音するポイント

- ① 伴奏の音が大きすぎるなど、演奏のバランスが実際のもので録音したもので違いが少ないこと
- ② 演奏の音量の幅（小さい音と大きい音の差）を狭くしないこと
- ③ 音割れの無いこと

① 演奏のバランスが実際のもので録音したもので違いが少ないこと

(1) 演奏のバランス

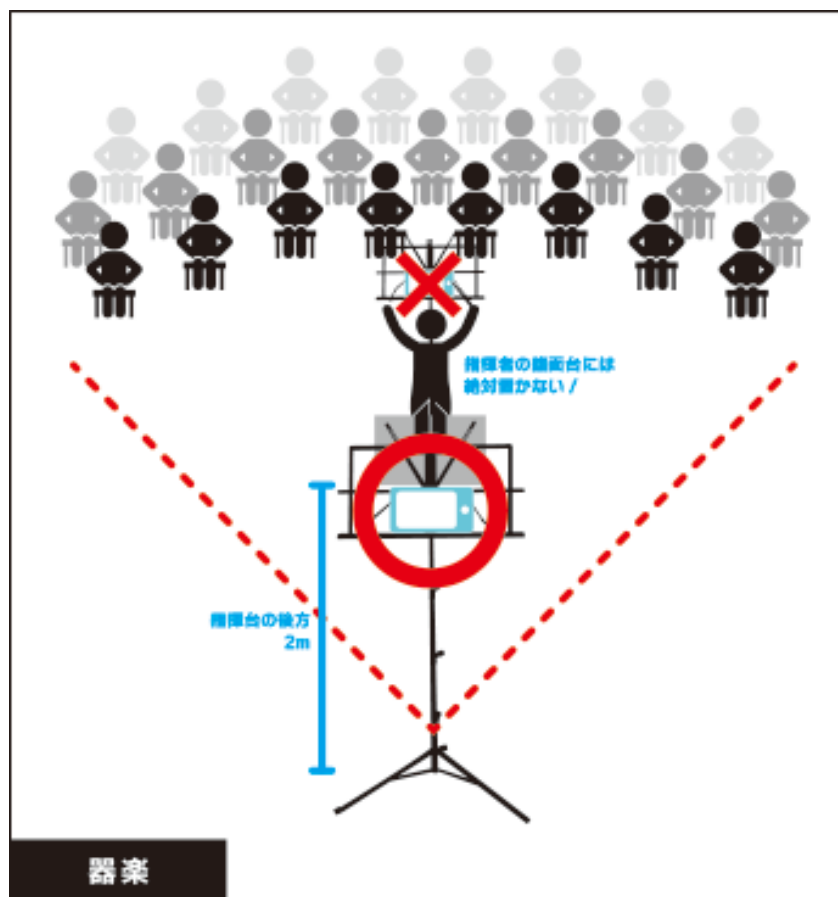
実際の演奏のバランスを崩さずに録音するために、録音機（またはマイク）の設置位置に注意してください。録音機（マイク）は、近くの音を大きい音量で、遠くの音を小さい音量で録音します。そのため録音機の設置位置によって録音される演奏のバランスが変わってしまいます。的確なバランスで録音するために、録音機は演奏するピアノや指揮者の譜面台には置かず、三脚や譜面台などを利用して単独で設置してください。また、録音機を手で持つと、録音機を持っている人の息や録音機を握っている音が入ってしまうため、できるだけ手で持たないようにしてください。



(2) 録音機を設置する位置

合唱を録音する場合、録音機は歌う児童生徒たちの真ん中を中心とし、指揮者から2mほど後方の高い位置に設置することが望ましいです（学習机の上に三脚を置くなどして設置することも可能です）。

重唱の場合、録音機は児童生徒たちから3mほど離し、高さは口元より高い位置に設置することが望ましいです。児童生徒たちの前にピアノがあり、録音機を高く設置することが困難な場合は、ピアノの蓋（ふた）が歌声を遮ってしまうため、少なくとも録音機をピアノの蓋より高い位置に設置することが望ましいです。



器楽の場合、録音機の中心は指揮者の位置または、演奏者の真ん中とし、指揮者から2mほど後方の高い位置（指揮者がいない場合は演奏者の最前列より3mほど離れた高い位置）に設置することが望ましいです。高さの目安はオーケストラや吹奏楽の場合、後方にいるトランペットやトロンボーンなどのベルより高い位置に設置することが望ましいです。

② 演奏の音量の幅（小さい音と大きい音の差）を狭くしないこと

一部の録音機には、録音する音量を自動的に調整する機能（『自動レベル調整』、『自動ピーク軽減』等）がついています。これらは聞きやすくするために、小さい音を大きく、大きい音を小さくする機能です。音量が自動的に操作されると音楽の音量幅が狭くなり、実際の演奏と違って聞こえてしまいます。このような機能がある録音機の場合、必ず機能を切るようにしてください（機種によっては手動調整への切替スイッチがあります）。

③ 音割れの無いこと

「音が割れる」というのは、一定の音量以上の音と同じ音量で録音されてしまい、音の内容が判断できなくなる状態です。例えば mf (メゾフォルテ) で割れた場合、それ以上の音量 f (フォルテ) や ff (フォルテシモ) が同じ割れた音となり、上記のように音楽の音量幅が失われてしまいます。このようなことが起きないように、ほとんどの録音機には録音する音の音量を表示する機能があり、これを『Gain (ゲイン)』、『Level (レベル)』などと表記している場合が多いです。この調整は自動ではされないため、実際に音量の大きいところを演奏して確認する必要があります。録音機を録音待機モードまたは録音状態にして、目視で『Peak (ピーク)』、『Over (オーバー)』、『Overload (オーバーロード)』などと書かれた箇所が点灯しないよう調整をしてください (多くの場合、音量がオーバーすると赤く表示されます)。

<補足> スマートフォンで録音する場合

録音機の設置位置などは上記に準じますが、スマートフォンのボイスレコーダー等を利用して録音すると、音量の操作が自動となってしまう、その機能が解除できない場合があります。お使いのアプリの仕様を確認の上、録音を行ってください。

～最後に～

※録音した音源は必ず全編再生し試聴をしてください。意図しない演奏を提出しないためにも、必ず確認をお願いいたします。

この手引きは、あくまでも参考資料です。

録音方法を悩んでいる方、困っている方は参考にしていただければ幸いです。